

16 首塚

のどかなチェスターの後家さんが
一人息子のために泣いている
パベン河にその墓がある
ビルマ人も寄りつかぬ墓だ
インド人民兵の将校プラグ・テワツリが
この墓ができた経緯を物語る 5

一丁のスナイドル銃が密林で火を吹き
誰かがほくそ笑んで姿を消した
第一掃討小隊のインド兵たちが
死んだ中尉を抱き起こした 10
額に大きな青い銃創が開き
後頭部はふっとばされていた

インド人民兵の将校プラグ・テワツリと
副将ヒラ・ラルが
この小隊の指揮を執り 15
ライフル銃で装備した二十名の兵たちは
河下へと進軍した
時すでに日暮れどき

皆は戦死した若き中尉を^{かじ}河岸に埋葬した
顔には毛布をかけて 20
皆は死んだ中尉のために涙を流した
全員が異国の兵たちだ
皆は一斉に中尉を称え
その墓所^{ほしよ}を造ったのだ

皆は聖水にかけて誓った 25
頂いた給料の塩にかけて誓ったのだ
英国人スミス中尉殿の魂が
胸を張って彼の神のもとに行けるよう
百名のビルマ人を道連れにして

- 天国の門を開けさせるようにと 30
- 第一掃討小隊の兵たちは
夜明けまで行軍した
やがて彼らは賊軍の村に着いた
パベンメイという名の部落
大砲らしきものが一門 森のはずれに据えられ 35
鉄菱がびっしりと行く手をさえぎっていた
- 将校のプラグ・テワッリは
弾を込めよと命じ
十二名のライフルを持った兵を
村の防備壁の下に潜^{ひそ}ませた 40
また側面からの援護射撃隊を
副将ヒラ・ラル指揮下に配した
- 第一掃討小隊の兵たちは
関^との声をあげ 打ち掛かり ビルマ人を殺戮^{まつりく}した 45
嘲笑^{あざわら}うがごとき大砲の筒先を
悲鳴を上げる賊軍に向けた
副将の援護射撃隊は
逃げまどう村民を殺戮^{まつりく}した
- 殺戮^{まつりく}の朝は 長かった 50
死者の列も 長かった
百もの首が 打ち取られた
その上さらに二つの首級^{しゅきゅう}を加え
第一掃討小隊の兵たちは
また中尉の墓所^{ぼしよ}へと戻った
- 兵はそれぞれ手に真っ赤に染まった籠を下げていた 55
その日だれの手も一様に真っ赤だった
炎に包まれた村のように真っ赤だった
あのパベンメイの村のように
そして ぼたり ぼたり ぼたり 籠からもれる血汁^{ちしる}が
行く手の草を真っ赤に染めた 60
- 兵たちは 戦利品の山を作った
大男のあごほどの高さまで

首の上にまた首を
目をつむったまま齒をむき出し歪んだ首を
硝煙で焦げた皮膚に焼き付いた 65
怒りと苦痛と恐怖よ

将校プラグ・テワッリは
勝利の山のとっぺんに
酋長の首を置き 70
息子の首をその下に置いた
世の見せしめのため
蛮刀と賊の旗じるしの孔雀旗を添えて

かくのごとく墓所は完成した
かくのごとく第一掃討小隊の怒りの見せしめは
すこぶる単純明快極まるものだった 75
たった一人白人が殺されたことに対する代価
第一掃討小隊の兵たちは
駐屯地に凱旋したのだ

それから河には静寂がもどった
河岸は静まりかえった 80
蛮勇を誇った酋長たちは四散した
そしてスナイドル銃は またと火を吹くことはなかった
ビルマ人の言うことには
白人の首一つには
百ものビルマ人の首であがなわなくてはならないからだ 85

のどかなチェスターの後家さんが
一人息子のために泣いている
パベン河にその墓がある
ビルマ人も寄りつかぬ墓だ
インド人民兵の将校プラグ・テワッリが 90
この墓ができた経緯を物語る

(榎井幹生訳)